

ヤングの『夜の随想』

村 上 至 孝

Or, Milton! thee; ah, could I reach your strain!

Or, his, who made Maenides our own.

Man too he sung: immortal man I sing;

Of bursts my song beyond the bounds of life;

What, now, but immortality can please?

Night Thoughts, I, 453-7, p. 423.

またはおんミルトンよ おんみの調べに及びたきものかな!

またホメーロスを英語に移せしかの人の調べに及びたし

彼もまた人間を歌いぬ われは不滅の人間を歌う

わが歌はしばしば人生の限界外に飛び出す

今は不滅にあらずしては読者に喜ばれず^①

これは『夜の随想』第一夜の終り近くにある、かなり有名な一節である。『人間論』によって、‘Whatever is, is right’ (I, 294) の哲学を吹聴したポープの向うを張り、堂々たる哲学詩を賦して十八世紀のミルトンにならうという

のが、作者ヤング (Edward Young 1683-1765) の心ひそかな念願であったと見てよいであろう。

だが『夜の随想』はむしろ叙事詩ではない。『失樂園』も古代や中世の叙事詩とはよほど趣きを異にし、さまざまな外面的動きの間を縫って作者の意見開陳が時にはやや煩わしいまでに試みられ、ウェストをして、‘unreadably great’ という評言を吐かせる原因をなしているのであるが、『夜の随想』は標題の示す通り、作者の感想を九千六百三十五行に互ってながながと述べた、いわば恐ろしく引き延ばされた抒情詩である。と同時に神の摂理と霊魂不滅を説き、背徳者に反省を促す思想詩、説教詩でもある。この詩が近代ロマン主義の一先駆をなし、ことに英国よりもドイツ、フランスでのロマン主義勃興にはるかにより大きな役割を演じたことは文学史上の常識であるが、それは作者にとつては運命の皮肉であっただろうし、この点のみを強調することはこの詩の正しい姿を伝えない恐れがある。古典的哲学詩の作成を意図したヤングは、彼を困んだ十八世紀の思想風土を超越するわけにゆかず、理神論色の濃厚なキリスト教信仰を解説したのであり、『序曲』や『逍遙篇』においてワーズワスが反駁を試みたものは、こうした機械論的宇宙観であった。^③

① *Night Thoughts* への引用は A. Chalmers (Ed.): *The Works of the English Poets From Chaucer to Cowper*, vol. XIII による。以下同じ。

② Michael West: ‘Young’s Night Thoughts,’ *Eighteenth Century Literature*, p. 89 (Oxford Miscellany)

③ ワーズワスが表現法の点でヤングに負うてゐることは J. S. Lyon: *The Excursion*, A. F. Potts: *The Prelude* などの指摘する通りである。

ヤングはかなり名門の牧師の子として生れ、オクスフォード大学卒業後文壇に身を投じ、五十歳近くになって聖職に就いた。詩人として初めのうちは完全なポープ派で、ヒロイック・カブレットを用いて諷刺詩、風俗詩などを盛んに書き、脚本にも筆を染め、王侯権神の庇護を求めながら文学で生活した。この頃の作品中にも、ジョンソンが ‘very

great performance」と激賞した *Love of Fame, the Universal Passion* などもあるが、もしこのままで終っていたならば、結局ポーブの垂流たる群小詩人の列に加えられただけで、後世ほとんど顧みられなかったであろう。

ところが、幸か不幸か、ポーブ、プライアー、アディソンなどのように文筆の力で榮達しようというヤングの野心は満たされず、ウェルウィン教区の牧師に納まり、それと前後して一七三一年初めて妻帯した。夫人エリザベスはリッチフィールド伯の娘であったが、その連れ子がテンブルに嫁し、一七三六年肺患療養のため南フランスのニースに向う途中、十八歳の若い身空でリヨンに客死した。やがて一七四〇年にはその夫のテンブルと、ヤングの妻エリザベスとが相次いで世を去った。このように自分よりはるかに年少の近親を三人まで次つぎに喪つたことが、すでに老境に入っていたヤングに大きな衝撃を与え、あきらめがたい痛恨と、諸行無常への反省とが動機になって、長篇『夜の隨想』は書き綴られたのであった。

牧師になる以前のヤングの生活についてポーブはこう語っている。「彼は崇高な天才を多分に備えていたが常識を欠いていた。従つて彼の天才は、指導を与えられず、たえず墮落して大言壮語に陥る傾きがあった。そのため彼は貴族たち、詩人たちの慰み者になつてばかげた青年時代を過したのであるが、彼が牧師になつたとき、元來極めて善良な心の持主であつたから、初めのうちは大過なく、後には模範的な牧師としてその職を勤めた」と。^①すなわち、青年時代には貴族の間に入し、彼らの飲心を買つて名を挙げようという野心も強く、おのずから輕佻浮薄の風習に染まつて生活も放縱であつたが、望みの満たされぬままに年も取り、迷いの夢から覚めて心機一転し、聖職に就いて以後は忠実な牧師として平穩な生活を送つた。彼がグレイやクーパーのように最初から学寮や田園に隠棲した詩人でなく、多年社交界を泳ぎ廻り、名や富を争う世俗の塵を全身にかぶる前半生を持つた詩人であることは、初期ロマン派の中で他に例のない特色であり、たとえ彼の青壮年期の作品にも憂愁を歌うものが二、三見出されるとしても、彼が天性の厭世家、憂鬱病患者では決してなかつたと断言できるであらう。

① O. Ruffhead: *Life of Alexander Pope*, p. 291. cf. Paul van Tieghem: *Le Préromantisme*, II, p. 22.

『愁訴、またの名、夜の随想』(*The Complaint; or, Night Thoughts on Life, Death and Immortality*, 1742-45) は、九巻一萬行に垂んとする長篇である。初めの巻には近親を失った作者の悲歎を訴える個人的な色彩が強く、第五夜以後は、作者の諦観から、人生のはかなさとキリスト教信仰の頼もしさを諄々と説いた談義になっている。但し、論説的な部分でも作者の感情が陰に陽に貫流して、世の常の教訓詩のような徹底した無味乾燥から救われている。

まずヤングはこの詩に無韻体を採用した。文壇にある間は完全にポープの流義に順応してヒロイック・カプレットを守り続けていた彼が、老来長詩を賦するにあたって敢えて無韻体を試みたことにはいろいろの理由が挙げられるであろう。十年あまり前に出たトムソンの『四季の歌』が広く好評を得た上に、その「秋」の巻において、ヤングに言及している行のすぐ前で *Cyder* の作者 John Philips が「押韻に煩わされぬ詩句で、イギリスの歌をイギリスの自由をもって気高く歌った第二の詩人」(‘the second/Who nobly durst, in rhyme-unlettered verse,/With British freedom sing the British song’) と讃えられていることが暗示を与えもしたのである。また、激烈な悲哀を吐露し、自己の人生観を滔々と開陳するためには押韻をたえがたい束縛と感ぜられたであろう。彼がこの頃押韻をどう考えていたか彼自身の言葉を知ることではできないが、晩年に発表した『独創文学管見』(*Conjectures on Original Compositions*, 1759) に盛られた考えは、この当時すでに彼の脳裡に芽吹いていたにちがいない。この論文の骨子は、天才が学識に勝ること、天才は法則や權威に縛られぬ自由を持つことを主張し、「古代人の法則に倣え」とか「自然とホメーロスとは同一だ」とかいう『批評論』におけるポープの説を反駁するにあり、従ってたまたま詩形の問題についても、ミルトンを推しポープを斥けて、「われわれの言う『無韻詩』とは、墮落せず呪われざる詩、原状に戻さ

れ、真の神々の言葉に復辟をせられた詩である」(‘... what we mean by “blank verse” is verse, unfallen, uncur-
sed; verse reclaimed, reenthroned in the true language of the gods;’)と断言してゐる。^① もあつた R. D. Havens
がその著 *The Influence of Milton on English Poetry* で跡をつけてゐるように、十八世紀にもミルトンの影響は脈々
と流れていたが、一方ポープの勢力はジョンソンに継承され、この文壇の大御所を囲む文人の一人であつたゴールド
スミスは、無韻詩を非難した論著『現代文芸の検討』(*Inquiry into the Present State of Polite Learning*) が右の
ヤングの論考と同年に出ていることを思えば、とにかく中年以後のヤングが文学に関して革新の立場にあつたことは
明らかである。

とはいへ『夜の随想』の無韻体が完全に成功しているとは決して言いきれない。その文体がよほど荒削りで、不規
則で、むらがあり、ミルトンのような峻厳流麗な調和を欠いていることは否めない。また「押韻せぬ二行句」(‘un-
rime couplet’)と揶揄されるように、押韻こそしてはなくても対句になつた詩句が多く、格言めいた語句も相当点
綴され、永らく影響下にあつたポープの詩風はさすがになおかなり強く名残を留めている。例へば

Man wants but little; nor that little long.

人は些少のものにて　しかも束の間にて足る

Short is the lesson; tho' my lecture long,

Be good—and let heaven answer for the rest.

わが説教は長けれど教訓は短し

善良であれ——その余は神に委ねよ

Life is the triumph of our mould'ring clay;

Death, of the spirit infinite! divine!

生は朽ちゆく肉の勝利
死は無限にして聖なる靈の勝利

などである。また、諺になつたものに

We take no note of time but from its loss.

時に気づくは時を失いてのちのみ

Procrastination is the thief of time.

延引は時盗人

Man is to man the sorest, surest ill.

人間には人間こそ最も辛く確かなる禍なり

などがある。^③

しかしながら、とにかくこの時代に無韻体を用いて長篇を試みた意気は壮とすべきであり、ミットフォードの指摘する、言葉余りて意足らずの難点も、^④彼の能力、環境や、この詩の主題などを考慮してむしろ看過してよいものである。いな、彼の詩興が高潮の極に達し、筆力が完全に充実したときには、ミルトンにも比肩すべき荘嚴な章句を生み出している。^⑤

In ardent contemplation's rapid car,

From Earth, as from my barrier, I set out.

How swift I mount! diminish'd Earth recedes;

I pass the Moon ; and, from her farther side,
 Pierce Heaven's blue curtain ; strike into remote ;
 Where, with his lifted tube, the subtle sage
 His artificial, airy journey takes,
 And to celestial lengthsens human sight.
 I pause at every planet on my road,
 And ask for him who gives their orbs to roll,
 Their foreheads fair to shine. From Saturn's ring,
 In which, of Earths an army might be lost,
 With the bold comet take my bolder flight,
 Amid those sovereign glories of the skies,
 Of independent, native lustre, proud ;
 The souls of systems ! and the lords of life,
 Through their wide empires !—What behold I now ?
 A wilderness of wonder burning round ;
 Where larger suns inhabit higher spheres ;

Night Thoughts, IX. p. 437.

熱烈な觀照のいと迅き車に乗り
 穹窿を穿てるがごとく地球を去る

上昇何ぞ速かなる！ 地球は縮小して退く
われ月を廻り、そのさらに彼方より
天の青き帷を貫き、遙けき奥を窺う

そはかの智恵深き賢者、遠眼鏡の筒差上げ
人為にて天空を旅し

人の眼を天の眼に引延す世界なり
われ途上の遊星ごとに車を停め

その球体を廻転せしむる者
その白き額を輝かしむる者を問う

あまたの地球をも埋むべき土星の環より
大胆なる彗星と共にわれさらに大胆に飛ぶ

おのずから備えし独立不羈の光を誇る
諸天のいと高き豪華の星群を縫いゆくなり

諸系の靈！ 生の主！
広大の領土を統ぶ！ さていま眼に映るは

周りに燃ゆる不可思議の広野
なお大いなる太陽なお高き空に住まえり

この一節を讀みながら、人は詩人と共に果なき夜空を天駆ける思いにしばしわれを忘れることであろう。

① *English Critical Essays, XVI-XVIII Centuries*, p. 291 (World's Classics)

② トーマはその大著『ヤング研究』の中で、ホープの『人間論』中の句とこの『夜の随想』中の句と類似したものを七つを数えあげてゐる (W. Thomas: *Le Poète Edouard Young: Etude sur sa vie et ses oeuvres*, p. 364)

③ 'The words overload the subject; and the magnificence of language is not always supported by a corresponding grandeur of thought.' J. Mitford: 'The Life of E. Young,' *The Poetical Works of E. Young*, I, p. xxxvii.

④ cf. '... it (*Night Thoughts*) has, with all its faults, a roll and swell such as had seldom been heard since the *Paradise Lost*.' M. West: *op. cit.*, p. 87.

『夜の随想』の詩風は全体としてたしかにロマンチックである。かの初期ロマン派の作品中最も広く知られているグレイの『墓畔の哀歌』などよりさらにロマンチックだとも言えそうである。新古典主義は「感情のおのずからなる流露」を抑制し、人生を理智で割り切り、割切れぬものはこれを機智諧謔に包んだ。これに反しヤングは自らの愁歎をそのまま詩に托していわゆる「涙の哲学」を展開した。また新古典主義は、白昼の世界、色と欲とに操られて揉み合っている浮世の姿を肯定的に描写し、ジョンソンのように「人の望みの空しさ」を歌うときでも、もろもろの社会事象を微笑をもって眺め、決して現実の人生を否定してはいない。しかしヤングは一切が黒一色に塗り潰される夜の世界を歌い、人の世の営みを斥けて信仰による永遠の生を讃えている。自己の感情を述べ、夜の天地を写し、キリスト教の信仰を説く——この三つの様相において『夜の随想』のロマンチックな特性がうかがわれるであろう。さきに述べた通りヤングは続けさまに三人の近親を失った。

The shaft flew thrice; and thrice my peace was slain;

And thrice, ere thrice yon moon had fill'd her horn.

Ibid., I, p. 421.

おんみの矢三たび飛び三たびわが平和を破りぬ

しかもかの月三たび満たさるうちに三たびなり

親と子、夫と妻、その間の死別ほどたえがたい断腸の思いに人を呻吟させるものがこの世にまたとあろうか。そしてこの悲哀を知るがゆえに人間は詩を、文学を、芸術を持つのである。天に太陽は失せ足許に大地も崩れ去ったかと思われる悲痛の衝撃、堰きあえぬ涙の淵に身も心も溶け去るばかりの悲歎の境地、それは遊戯的な感傷主義と決して混同されてならない敵愾崇高な人間性の奔騰である。新婚の夢まどかなうら若い身を異郷の土と化した娘を、ヤングはナーシッサという仮名のもとにこう歌って悼んでいる。

Like blossom'd trees o'erturn'd by vernal storm,

Lovely in death the beauteous ruin lay;

And if in death still lovely, lovelier there,

Far lovelier pity swells the tide of love.

And will not the severe excuse a sigh?

Scorn the proud man that is asham'd to weep;

Our tears indulg'd indeed deserve our shame.

Ye that e'er lost an angel! pity me.

Ibid., III. p. 429.

春の嵐に倒されし花の盛りの樹々のごと

麗しの汝が姿 骸となりし今もなおめでたし

死してなお麗しければかしこにてはなお麗しく

はるかに麗しき隣れみが愛の潮を高むるなり

敵しき人も歎息を許さざらばめや

泣くを恥となす誇りかの人をさげすめ

恥ずべきはただ徒らに涙に溺るる折のみ

愛いとしきものを失いしことあるおんみら われを憐れみたまえかし！

しかしヤンソはすでに老人であり、その勤めの道は神に仕える聖職である。己れ一人の悲しみにいつまでもかかずらっているべきではない。この哀しい現実を戒しめと悟って、死を超えた永遠の生を、自ら求めると同時に他に向って説き明かなねばならぬ。第四夜から第五夜に移ると共に、情緒的な歌いよりは冥想的、論説的口調に変わる。但し、上にも記した通り、どのように理窟ばったことを述べていても、その後にはいつも作者自身の感情が脈打っており、そのことがこの詩の注目すべき特性をなしている。トーマも『夜の随想』における「自我の再出現」(‘reapparition du moi’)を強調してこのように言っている。

Dans les Nuits... par un coup d'audace inconnu depuis de longues années à la littérature anglaise, l'auteur d'un grand poème prend la parole en son propre nom et initie ses contemporains aux douleurs qui lui déchirent le coeur. C'est la réapparition du moi dans un domaine d'où la tradition courante l'avait formellement banni, du moi accompagné, si l'on veut, de manifestations parfois fantasques et extravagantes, mais aussi du «moi» avec son ardeur communicative, ses elans de tendresse et de regrets, toute cette force de passion individuelle que l'homme ne saurait toujours réprimer et dont l'absence avait desséché et glacé les vers de l'école néo-classique,

W. Thomas : *Le Poète Edvard Young*, p. 373.

『夜の随想』では、英文学において永年知られなかった大胆なやり方で、長篇詩の作者がその本名で語り、彼の心を引裂く悲し

みに同時代の人びとを導き入れている。これは当時の伝統が正式に追放していた領域に自我が再出現したことである。尤も時には奇怪至極な表示を伴ってはいるが、とにかく自我であることに変わりはなく、そこには伝達性の熱情、情愛と口惜しさの躍動、人がつねに必ずしも抑えきれず、しかもそれがなくて新古典派の詩が干からび凍っていた個人的感情のあらゆる力が含まれている^①。

① ティエゲムもこの詩の主観性を重く見ている。

… il est vrai … que le poète n'y est vraiment éloquent que lorsqu'il laisse parler sa propre sensibilité, et que cet élément subjectif et personnel, même dans la controverse philosophique, est la véritable, la féconde nouveauté des *Nuits*.

Paul van Tieghem : *Le Pétronianisme*, II, pp. 34-5.

人は *Zarathustra* の中の、夜の声にわれわれの覚醒を促す有名な一節を知っている。現代流行の実存主義をこれに結びつけて論じている評論家もある。わたくしはヤングにそれほど高い自覚があったとは考えないが、十八世紀の前半ポープの詩風一世を風靡していた時代に、かように声を大きくして夜を讃えた長詩のあることは、十分注目に値する事実だと思ふ。詩人の憂鬱が黄昏を愛し樹蔭を求めるのはミルトンの遺風余韻であるとしても、またウィンチェルシィ夫人やパーネルによって「夜と墓場の詩」が先鞭をつけられていたとしても、深夜墓地をさすらしいつつ宇宙の廣大と人生の神秘に深く思いを潜めることはヤングの独創であった。Léon Lemonnier はヤングにおける夜と死の意義を次のように述べている。

Si Young erre ainsi parmi les tombes, c'est qu'il aime surtout la nuit parce qu'elle est l'image de la mort, parce que c'est le moment où les morts peuvent revivre. Il ne connaît ni le nihilisme, ni le désespoir accablé, mais il trouve la nuit et la mort plus intenses que le jour et la vie … la mort n'est pas

conçue comme la cessation de la vie, ni même comme une entrée dans l'éternité ; elle est ramenée dans la vie par les pensées et les images qu'elle fait naître. Il n'est pas douteux qu'à cet égard, Young ait grandement innové.

Les Poètes Anglais du XVIII^e Siècle, p. 89.

ヤングがかように墓の間をさまようのは特に夜が好きだからである。夜は死のイメージであり、死者がよみがえりうる時だから夜を愛するのである。彼はニヒリズムも銷沈の絶望も知らないが、昼と生より夜と死の方が一そう強烈なものだと見る。……死は生の終止と考えられず、永遠への参入となえも考えられていない。死はそれが生ぜしめる思いとイメージを通して生の中に呼び戻される。この点でヤングが大きな革新を遂げたことは疑いの余地がない。

この詩の筆を起して間もなく彼はこう言つて「夜」に呼びかける。

Night, sable goddess ! from her ebon throne,
 In rayless majesty, now stretches forth
 Her leaden sceptre o'er a slumbering world.
 Silence, how dead ! and darkness, how profound !
 Nor eye, nor listening ear, an object finds ;
 Creation sleeps. 'Tis as the general pulse
 Of life stood still, and Nature made a pause ;
 An awful pause ! prophetic of her end.
 And let her prophecy be soon fulfill'd ;

Fate! drop the curtain; I can lose no more.

Night Thoughts, I, 18-27, p. 420.

黒き女神 夜よ! 今し漆黒の玉座より

光なき威儀を正しつその鉛の笏を

眠りに沈める世界の上にかざすなり

死のごとき沈黙! 深遠なる闇黒!

目に見ゆるもの耳に聞ゆるもの一としてなし

万物は眠る 全生命の脈停まり

天地息を休めあるがごとし

その終末を予言する畏ろしき休み!

その予言速やかに満たされよかし

運命よ! 幕を閉じよ われもはや失うものなし

夜はなぜ彼の恍惚を誘うか。夜はわれわれを永遠の生によみ返らせるからである。人は覚めているはずの昼に眠り、眠りに入るべき夜に目覚める逆説にたえねばならぬ。人間の小智慧がわがもの顔に跳梁する昼こそ百鬼夜行の世界であり、万籟寂として声なく無限の闇黒に包まれた天地と相對するとき、わが魂は五尺の肉体を超えて神靈と交る。ヤングは、「闇とは神が人間とその虚榮とを距てるためさし延べたもうた慈愛の御手だ」と言つて闇を礼讃する。

Darkness has more divinity for me;

It strikes thought inward; it drives back the soul

To settle on herself, our point supreme!

There lies our theatre! there sits our judge.

Darkness the curtain drops o'er life's dull scene;

'Tis the kind hand of Providence stretch'd out

'T'wixt man and vanity; 'tis reason's reign,

And virtue's too; these tutelary shades

Are man's asylum from the tainted throng.

Night is the good man's friend, and guardian too;

It no less rescues virtue, than inspires.

ibid., V, p. 439.

われには闇がなお聖なるものなり

思い内に向い 魂は退きて

わが至高点なる魂自身に休らう

そこにわが舞台あり そこにわが審判者坐せり

闇は人生の退屈なる場面に幕をおろす

人間とその虚栄とを距つべく

さし延べられし神の慈愛の御手なり

理性と美德との治世なり

守護の靈は汚れし群よりの避難所なり

夜は善き人の友 はた保護者にて

あるは徳を励ましあるは徳を救う

ちひと少し問を置いて次の句がある。

What awful joy ! what mental liberty !

I am not pent in darkness ; rather say,

(If not too bold) in darkness I'm embower'd.

Delightful gloom ! the clustering thoughts around

Spontaneous rise, and blossom in the shade ;

But droop by day, and sicken in the sun.

ibid., V, p. 440.

何たる莊嚴の歡喜！ 何たる智能の自由！

われ闇に閉なれるに非ず むしろ言わん

(強き言葉を許したまへ) 闇の四阿に憩えるなりと

歡ばしき闇黒よ！ もらもらの想念四方に群り

おのずから角ぐみ 蔭に花開く

されどそは昼にうなだれ陽を受けて病むなり

同じ趣旨の章句はなおこの詩篇のそここから拾い出すことができるが、それは省略してよいであろう。夜の闇の中では形而下の世界、自然の世界は、月や星を除いて一切消滅し、われわれはただ形而上の世界、精神の世界に相對せられる。ヤングの言葉を藉れば「夜の聖なる蔭は宇宙を神殿に変え」(‘night’s consecrating shades, / Which to a temple turn a universe,’ *Night IX*) 「夜には無神論者の半は信ちる」(‘By night an atheist half-believes a God,’ *Night V*) のである。

ポーアの『人間論』では、現世が神の定めたもうた最善のものであることが論証されているが、これと張り合う意図をもつ『夜の随想』では、現世ならぬ彼岸の世界、地上七十年ならぬ永遠不滅の生の意義が強調される。従つてこの詩の中では、生と死、現世と彼岸、地上の快樂・幸福と天上の歎喜・清福などがたえず対照させられ、前者のはかなく価値なきこと、後者の永遠にして貴きことが繰返し繰返し説かれている。もちろんこの主張そのものは何も珍らしいことではなく、キリスト教に限らず多くの宗教の教えるところであり、ギリシアやローマの詩人たちも歌っており、ヤングの少し後に出了たジョンソンの *Vanity of Human Wishes* (1749) にも採り入れられている。ただヤングの場合自己の体験から発した真卒の叫びであるだけに、一見無味乾燥な長談義にも感情の裏づけがあり、しかと限定しがたい力をもつてわれわれの胸に迫るのである。

人生は大海原であり、作者は岸辺に坐して、波間にもかく人びとの苦闘を静観している。鋭く光る水晶のような作者の心境と濁流逆巻き狂騰する現実界との対照のうちに、熱情的な信仰の聲が聞かれないであらうか。

Blest be that hand divine, which gently laid
My heart at rest, beneath this humble shed.
The world's a stately bark, on dangerous seas,
With pleasure seen, but boarded at our peril;
Here, on a single plank, thrown safe ashore,
I hear the tumult of the distant throng,
As that of seas remote, or dying storms:
And meditate on scenes, more silent still;

Pursue my theme, and fight the fear of Death.

Night Thoughts, IV, p. 433.

この茅屋にわが心そと置きて

休め給いしかの聖き御手は有難きかな

浮世は荒海に浮ぶ麗しの船

見ると榮しけれど果るは危し

われ岸辺に打上げられし一枚の板に坐し

かなだに叫ぶ人群のなわめきを聞く

その音 遠き海または衰えゆく風でも似たり

われこころなほ静かなる景色を眺め

汝が教えを守り死の恐れと闘ふ

A wilderness of joy! perplex'd with doubts,

And sharp with thorns! a troubled ocean, spread

With bold adventurers, their all on board!

No second hope, if here their fortune frowns;

Frown soon it must. Of various rates they sail,

Of ensigns various; all alike in this,

All restless, anxious; tost with hope; and fears,

In calmest skies; obnoxious all to storm;

And stormy the most general blast of life:

All bound for happiness ; yet few provide
 The chart of knowledge, pointing where it lies ;
 Or virtue's helm, to shape the course design'd
 All, more or less, capricious fate lament,
 Now lifted by the tide, and now resorb'd,
 And further from their wishes than before :
 All, more or less, against each other dash,
 To mutual hurt, by gusts of passion driven,
 And suffering more from folly, than from fate.

ibid., VIII, p. 465-466.

歓楽の曠野よ！ 疑惑に悩み
 荊棘に傷つく 波騒ぐ海よ！
 すべを船に賭けし胆太き冒險者集う
 ことに運勢非なれば再び望みなく
 やがて非なるべきこと必定なり
 彼らが船の速き旗幟はさまざまなれど
 いずれ等しく不安焦慮に駆られ
 快晴にも望みと恐れに揺らぎ嵐を憎む
 しかも人生を吹渡る風は嵐なり
 すべては幸を目とせども

その位置を示すべき知識の海図

予定の路行くべき徳の舵備えたるは稀なり

いずれ等しく気まぐれの運命を歎き

潮に乗ると見ればまた吞まれ

その望みよりいや遠く離れゆく

いずれ等しく感情の疾風はげ風に追われつつ

互いに衝突し 互いに傷つけ

運命ならで自らの暗愚に苦しむ

またヤングは、忠実な英国教会の牧師として、当時勃興しつつあったメソヂストたちの狂熱を嫌ったにも拘らず、この『夜の随想』にうかがわれる限りでは、やはり信仰は智でなくて情より入るべきだと言ひ、情熱の宗教を讃えてゐるのである。そしてこれを詩的作品として読むわれわれはそうした章句の方に強い感銘を受けるのであり、皮肉なことにメソヂストたちが『夜の随想』を大いに愛誦したのも当然と思われる。

Oh ye cold-hearted, frozen, formalists !

On such a theme, 'tis impious to be calm ;

Passion is reason, transport temper, here.

Rise odours sweet from incense uninflam'd ?

Devotion, when lukewarm is undevout ;

But when it glows, its heat is struck to Heaven ;

To human hearts her golden harps are strung ;

High Heaven' orchestra chaunts amen to man.

ibid., IV, p. 437.

おお 心冷く凍りたる形式家よ！

かかる題目に平然たるは不敬なり

ここにては熱情ぞ理性 忘我ぞ節度なれ

焚きつけざる香より芳しき薫昇らんや

信仰も生温ければ不信なり

燃え輝きてこそその熱は天に通じ

人の心に応じて天の黄金の琴かき鳴らされ

高き天上の樂は人に向いて讃歌を歌う

ところで、宇宙の大系とそこにはたらく神の力との説明においてヤングは必ずしもキリスト教の正統に忠実とも言いきれない。レズリィ・ステイーヴンが巧みに言っているように、十八世紀理神論争における双方の差異は微妙であり僅少であって、英国教会の信条を強く弁護する人たちの中にも、理神論者以上に理神論者のな人があった^①。当時の神学者、哲学者たちはいずれも、ちょうどニュートンが物質界に関してなし遂げたと同じことを精神界に関して果そうと努めたのであり、例えば Joseph Butler など英国教会の牧師としてその職責を立派に果たしたのであるが、その代表作 *Analogy of Religion Natural and Revealed to the Constitution and Course of Nature* (1736) は、伝統的なキリスト教の教えが近代哲学思想によって否定されるどころかその真实性をますます加えるものであることを大いに論証した力篇であるにかかわらず、あまりに論理一辺倒のため却って読者を懐疑派の方へ走らせたと言われる。『夜の随想』を流れる作者自身の感情が同時代人にも現代人にもひとしく訴えたとすれば、そこに説かれる神学

説の方は、同時代人の共鳴を呼んだ代りに現代のわれわれにはただ反撥を起させる大きな原因になっている。J. W. Mackail は『夜の随想』が一世の大歓迎を受けた主要な理由が、そこに説かれた道徳乃至神学にありとし、しかもその神学体系はこの時代に最も有力だった説にすぎないと言いつつ、さびにこう記している。

The whole poem is, or purports to be, a refutation of atheism and a vindication of Christianity. Young's theological system is, indeed, neither profound nor coherent. He fluctuates between rationalistic Deism and doctrine, little, if at all, removed from that of the Methodist revival.

J. W. Mackail: *Studies on English Poets*, p. 129.

この詩全体は、無神論の反駁とキリスト教の弁証とである、あるいはそれを目的としている。ヤングの神学大系はたしかに深遠でもなければ首尾一貫してもない。彼は、合理主義的理神論と、メソヂスト信仰復興の教義にほとんどそっくりの教義との間を往々戻りついでる。

単調な章句を一々引用することは差控えるが、例えば人間の自由意志についてヤングはこう歌っている。

Not man alone, all rationals, heaven arms
With an illustrious, but tremendous, power
To counteract its own most gracious ends;
And this, of strict necessity, not choice;
That power denied, men, angels, were no more
But passive engines, void of praise, or blame.
A nature rational implies the power

Of being blest, or wretched, as we please ;
Else idle reason would have nought to do ;

Night Thoughts, VII, 1290-8, p. 463.

天は人間のみなならずすべての理性者に
天の最も恵み深き目的に逆う
はなばなしくも恐ろしき力を授く
これ選択ならで厳しき必然のものなり
もしこの力持たずば人間も天使も
受働的器械にすぎず賞罰に働せず
理性的本質たるものは
欲するままに福福を受けうる力を含む
さなくば理性は無聊に苦しむのみならん

また自然を統べる神については次のように述べている。

But, miracles apart, who sees him not,
Nature's controller, author, guide, and end ?
Who turns his eye on nature's midnight face,
But must inquire—"What hand behind the scene,
What arm Almighty, put these wheeling globes
In motion, and wound up the vast machine ?"

ibid., IX, p. 484.

なされ奇蹟を離れても誰か神を見知らぬ

自然の統御者 創り主 導を手にて究極なる神を

自然の深夜の面おもてに眼を向へる者は

必ずかく問う——「この場景の背後のいかなる手

いかなる全能の腕うでぞこれら廻転する球体を運動せしめ

巨大なる機械のねじを巻きたりしか」と

① Many an honest crusader, who had assumed in all sincerity the badge of the true faith, was in fact a rationalist to the core; the orthodox flag covered differences wider than those which separated its followers from its enemies; and in many cases nothing was wanting but a slight change in the point of view, or a little more knowledge of critical results, to alter the whole distribution of the forces. The Christianity of many writers consisted simply in expressing deist opinions in the old-fashioned phraseology.

Leslie Stephen: *History of English Thought in the Eighteenth Century*, I, p. 91.

ウェストは『夜の随想』の単調なが一つには韻律そのものが起因するものを例証したのぢ、いま一つはその主題からも来ていふことを指摘してこう記してゐる。

.....but to write a purely didactic monologue on so well-canvassed a subject as immortality, and to make it interesting, is absolutely impossible, doubly impossible to a man of Young's views. Had Young been an atheist himself, or a heretic, or a pantheist, or even a Methodist, it might have been easier: but when the poet is the quintessence of orthodox churchmanship, be he Montgomery, or be he Milton, he cannot produce a really readable poem on that subject. He cannot invent new theosophic theories,

pantheistic paradoxes, describe new-fangled Nirvanas, or mock at our antiquated heaven: he can only repeat the old story which gains nothing by being diluted in iambic decasyllabics.

M. West: *op. cit.*, p. 94.

靈魂不滅というような論じつくされた題目に関して純教訓的な独白を書いてこれを面白いものにするということは、ヤングのよ
うな見解を持った人間には絶対不可能、二重に不可能である。もしヤングが自ら無神論者であったか、異端者、汎神論者、さ
らにはメソヂストなどであったとしたら、それはもっと容易だったかもしれない。だが詩人が正統的聖職者精神の真髓である場
合、彼がモンガムリイであろうとミルトンであろうと、そうした題目について真に読んで楽しい詩を産み出すことはできない。
彼は新たな神知学の理論や汎神論的逆説を創案したり、新流行の淫樂を描写したり、時代おくれのわれわれの天国を嘲笑したり
はできない。彼はただ古い古い昔話を繰返せるだけで、しかもその話は抑揚格十綴の詩行で薄められたところで何もならないの
である。

たしかに陳腐な主題を採り上げてその周りを幾度も廻転しているところに、この詩の、特に第五夜以後の退屈さが
生れる。しかも、ウェストは「正統的聖職者精神の真髓」と呼んでいるが、ヤングの神は聖書の神であると同時に宇
宙という機械を運転する技師としての神でもあり、彼は信仰に入る道が理性よりも感情にありと言いながら、自然宗
教的な弁神論を展開している。この点は十八世紀の読者を大いに喜ばせると共に、ワーズワス以後の読者には不満を
与えるばかりとなった。

『夜の随想』もトムソンの『四季の歌』と同じく過渡期の性格をはっきり帯びている。これにロマンチックな性格
のみを期待すればあてがはずれるであろう。しかし談義の多い長篇だからといって全く繙読にたえないように思いこ
むのは早計に失する。いわば美しい花と醜い雑草、緑の草木と茶褐色の石ころとが雑然と入りまじった野原といった

感じを受けはするが、われわれはこの詩の局部的な欠点に捉われず、全篇にみまざる雄渾壮大な気魄や、滔々たる雄弁の与える感銘を賞味すべきであらう。この点に関するジョンソンの次の評言は適切と思われる。

In his Night Thoughts he has exhibited a very wide display of original poetry, variegated with deep reflections and striking allusions, a wilderness of thought, in which the fertility of fancy scatters flowers of every hue and of every odour. This is one of the few poems in which blank verse could not be changed for rhyme but with disadvantage. The wild diffusion of the sentiments, and the digressive sallies of imagination, would have been compressed and restrained by confinement to rhyme. The excellence of this work is not exactness, but copiousness; particular lines are not to be regarded; the power is in the whole; and in the whole there is a magnificence of vast extent and endless diversity.

S. Johnson: *Lives of the English Poets*, II, p. 458 (World's Classics)

『夜の随想』において彼は、深い思索とすぐれた暗示とによって変化にあふれた独創的な詩の極めて広汎な姿、豊かな想像力があらゆる色と香りとの花々をまき散らす思想の広野を開陳した。これは、無韻体に変えれば必ずわるくなるといった数少ない詩の一つである。もし韻に縛られていたら、感情の奔放な拡散や想像の逸脱的な噴出が圧縮され拘束されたであらう。この作品の美質は厳密性でなく豊満性である。特殊な行を注視すべきでない。力は全体にある。そしてその全体のうちに茫漠たる広がりとも無限の多様性ともから生れる荘嚴さがある。

『夜の随想』がヨーロッパ大陸諸国のロマン派に与えた刺戟、ことに五歳の愛児ゾフィー・フォン・クーンを失ったノヴァーリスがこの詩を読んで感激したことや、ラマルチーナに類似の詩句が多く見出されることなどは、文学史上の事実として広く知られていることであるが、この詩はそれだけで歴史的使命を終った過去の遺物では決してなく、数多い英詩の中でも珍らしい特色をもち、教訓的でありながらしかも情緒的な詩、Lord Lytton 風によれば、

「英語の最も美しい教訓詩」(‘le plus beau poème didactique de langue anglaise’)として、もっと多くの人びとに知られてよいであろう。

① W. Thomas : *op. cit.*, pp. 546-8.

② *Ibid.*, p. 386.

追記

右は永らく手許に留めたままだった旧稿にはほ全面的な補正を施したものであるが、旧稿執筆当時貴重なヤング文献を貸与された級友 西藤寿太郎兄に対し、この機会に心から厚くお礼申上げたい。